

第一章 言わないのにわかっていることば---言語習得とその先

①子どもが毎日のように見せてくれる「言い間違い」

- ・これ食べたら死ぬ？
- ・ほんとうに死まない？
- ・まだきない（来ない）ね。
- ・あ、こた（来た）よ。

（学校現場では、言い間違いとして、指導されるが）多くの言語学者や言語習得の研究者にとっては、そもそも「間違い」とはされていない。日本語の動詞の正しい形（活用形）について、活用一覧表を覚えるなどの方法で学習して身につけるような状況（おそらく学校）で、例えば試験で「死ぬ」と書いたら明らかに間違いと呼ぶしかありません。

しかし、子どもが自然に日本語を身につける過程では、そのような教わり方はしない。大人は正しい例で言葉を使っていて、子どもは大人が使う「正しい例」を模倣して取り入れることを繰り返すのではなく、子どもは（確実に）間違っ使用。「#ちいさい言語学者の冒険」に沢山の例がある。模倣ではなく、何が起きているのか？

<推理>ナ行とマ行の五段動詞は、時には同じ形をとることがヒントになる。

読んじゃった、→ 読む ☆ナ行とマ行は、いずれも「～んじゃった」となる
死んじゃった、→ 死ぬ

②言葉の知識

- (1) 語彙の知識・・・どれだけ単語を知っているか
(いつまでも増やし続けられる)
- (2) 文法知識・・・どのように文構造の中に必要に応じた形をとらせて、配置するか
(6-7歳で母語における習得がおおむね達成される)

よって、上記のような「言い間違い」は、幼児時代を経ると、減る。

③動詞以外の「言い間違い」

例) それは、そちの勘違いであろう！

でも、こちは・・・

☆こ・そ・あ・ど言葉の体系を瞬時に当てはめた活用

④動詞の連用形から名詞の形を作れることからきた「間違い」

走る → 走ります → 走り 眠る → 眠ります → 眠り

遊び → 遊びます → 遊び やする ← やすります ← やすり

誤例) ちゃんとやすらないと手を切ります

☆ある語の派生形から元の形に戻すという類推をして、実在しない語を作る

→逆成 (backformation)

誤例) いろいろながたがある (型がある)

→〇〇型のように、型は複合語としての用例が多い。そして濁音になる

誤例) わたしのぐみはね (組はね)

例) インスタ映えする → ばえる (映える) 「ばえる」では変換しない

⑤名詞+動詞の名詞形の複合語について・・・メタ言語能力

a うさぎ狩り・・・(殿様が) うさぎを狩る

a 鹿狩り・・・(殿様が) 鹿を狩る

b 鷹狩り・・・(殿様が) 鷹を狩る → (殿様が) 鷹で、□□を狩る

a レタス栽培 b ハウス栽培

a 床拭き b 水拭き

問) PCR検査 抗原検査

☆大人は頭の中の辞書に、そのままの表現が見出し語になって収まっている (語彙化)。

子どもは経験値がそこまで達していないから、違和感を感じて隠れた法則を見つける。

⑥日本語の構造的多様性

例) すごく評価を下げられている気がする

例) 危険な原発はすべて廃止します

第二章 逆さま文字、何が逆さま?・・・文字の認知

(略) 次回に

第三章 英語にあって日本語にないもの?・・・目的語と関係節、そして主語?

①修飾戦線異常あり？

問) 線を引いた部分の言葉の意味をくわしくしている修飾語をえらんで丸で囲みましょう。

姉は、すっぱい みかんを 食べた。

正解)

問) 私は、おじいちゃんに 手紙を 書きました。

正解)

解説) 小学校の学校文法では、「主語」「術語」を習い、それ以外は「修飾語」と扱う。

外国語をならった大人には「術語の表す内容の及ぶ対象としての「目的語」と、対象表現についての情報を追加したり限定したりする「修飾語」は別々に扱う。

☆学校では、連用修飾語（副詞的な働き）や連体修飾語（形容詞的な働き）の区別をする。

つよく叩く きれいな花 赤い靴 久しぶりに会う

②英語では、目的語を省くと誤用となる

例) My sister ate an orange. I helped my aunt.

My sister ate yesterday. I helped yesterday.

③日本語のほうが自由だ？（目的語を省く）

例) 叔母を手伝ったよ

昨日手伝ったよ。

手伝ったよ。

例) ごみは、ぼくが捨てておいたよ → ぼくが、ごみを捨てておいたよ

あなたが好きよ、とっても。 → (ぼくは) あなたが好きよ、とっても。

→ (A君も) あなたが好きよ、とっても。

☆このようにあいまいな表現は、教科書には回避されている。

☆実世界の小学三年生は、「主語」「修飾語」を答えられなくても、現実の生活の場では正確に意図を適切な表現にのせて発信し、理解している。

★このような言葉の知識をどうやって整理分類すればいいか、微妙な例も方かくした形で一般化（説明）するのに苦労しているのは大人の方だ。教師は、（授業）時間内に説明しきれるように、という制約があるから大変そうだ。ただ、「子どもがわかるように」「教師が時間内に説明しきれるように」最大限シンプルにまとめられた説明からはみ出す部分があるのが、言語の本当の姿。知らなくても使えている、そんな言葉の決まりについて考えることが、知識と現実との接点を見つける機会になるはず。説明通りでないところに突っ込み

を入れる子どもがいたら、いつでも受けてたつ準備をするためにも、大人の方も心のスイッチの感度を上げて先回りしたものだ。

④人食いにんじんの恐怖

例) (動物園にて)「ニンジンはやぎ・ヒツジも食べてくれるよ♪」

??あなた(人)も食べる?

→ やぎ・ヒツジが、ニンジンを食べてくれるよ

★目的語を表す「を」をつけると、混乱することがない。

★「が」「は」は主語ではなく「主語的なもの」とっておけばいいと考えている

例) ボクはウナギだ

例) こんやくは太らない、アイドルは太らない、夏場は太らない

★「～についていえば」と主語の情報を取り立ててくれる

「副助詞」の中の「取り立て詞」と呼ぶ(らしい)

★この「は」は、「が」「を」を駆逐してしまうので、聞き手(読み手)が判断を強いられる。

例) やぎ・ヒツジはニンジンを食べたけどトマトは食べなかった。

??「は」が主語だったら、どれが主語?

★日本語ではどれが主語かわからない、主語がないは、意外に普通。(主題優勢言語)

★英語は仮でもいいから主語のあるべき場所に存在してもらおう(主語優勢言語)

⑤関係節って英語で出てくるやつですよ?

例) 北海道では、広々とした牧草地で乳牛を育て、牛乳を生産する がさかんである。

誤答) うし

牛乳を生産する「うし」・・・これだけなら、間違っていない表現

a 牛乳を生産する「らく農」

b うしが生産する「生乳」 「」は先行詞

☆修飾部が文の形をとる、主語か目的語が消えている、消えているものと先行詞との関係

▲日本語には関係代名詞(that, what など)がない、英語では先行詞が先に位置する

★「いつ」「どこ」「何のために」とかいろいろある。

⑥これって本当に関係節なの?

日本語は、関係節に、かなりフリーダムである。

・全米が泣いた映画 ・サンマを焼いている煙 ・湯がわいた音

- ・声がよくなる飴 ・走り出したくなる気分
 - ・広々とした牧草地で乳牛を育て、牛乳を生産するらく農 → 牛乳を生産するうし
 - ・華やかに香り立つ紅茶ケーキのふんわりアイスサンド
 - ・富士山の銘水で炊きあげた紅鮭がゆ (シェフが)
 - ・行列ができるお店のボロネーゼ
 - ・ベルギー産の発酵バターが華やかに香るクロワッサン
 - ・糖質を変えたシュークリーム (ぼくって糖質が多すぎる？って考えたシュークリーム)
- ★関係説は、日本語英語で随分表現に違いがある。

第四章 日本語って難しいの？・・・文理解と曖昧性

① 例) 警察官が中学生をカツアゲしたヤンキーに説教した。

→ 警察官が「中学生をかつあげした」ヤンキーに説教した。

文全体の情報を一度に得ることができない、同時に文頭から文末まで一度に入力できない
 入力は順序を追って少しずつ得られる情報である。即時的・逐次的に解釈を与えていく
 やっかいなのは日本語の「大事な情報は最後」という特徴だ

【ガーデンパス現象】文を読んでいる最中に、頭の中で文の文法構造を徐々に割り出す作業
 の中で「あ、違った」となる反応やそれによる処理作業の滞りのこと。

例) 警官が中学生をカツアゲした・・・、で文が終わればいいが、カツアゲしたヤンキーに、という言葉で、ここで解釈が一転。ヤンキーの入力により、「中学生をカツアゲしたヤンキー」の部分がひとまとまりの、関係節で修飾された名詞句であり、「警官が」のあとでいちど文が区切れていたのか、という風に頭の中で解釈される。「警官」と「中学生」は同じ述部を共有していなかった・・・となる。

②英語に直してみる

英語では「ヤンキー」の関係代名詞として who を使うので、人のことだとすぐにわかるが、日本語にはそれに該当する言葉がない。

リアルタイムに読んだり聞いたりして理解する側にどれだけ新設か、を考えると、日本語はとて不親切だ。

私たち日本語話者は、聞いてなかったよ！関係節の登場や、「動詞の肝心な情報が最後に来るのでどんでん返しやむなし」的な文を、ほぼ日常的に、大きな混乱もなく無意識に処理している。

日本語では、単語の列を得られた順に機械的に流れ作業で解釈していくという以上の、相当高度な処理がされているはずだ。

③大事なことをなぜあとに？

「が」「を」「に」の働きによって文の意味の予測が立ちそうだと期待されるが、「は」によって全ての格助詞の情報を駆逐されるので、最後に大事なこと（術語）をもってくる必要があるのではないか。

④日本語の「自由」な側面

- ・省略の自由 ○叔母を手伝った。 ○昨日手伝った。 ○手伝った
- ・語順の自由 ○警察官が犯人を逮捕した。 ○犯人を警察官が逮捕した。

しかし、表現の決まりが柔軟だということは、表現された文を解釈する側にとってみたら、情報が少ないことを意味する。多数の可能性を残したまま、読み進めていかなければならない。

⑤全部読んでも結局あいまいなこともある

・NHK でテレビ解説を務めた北の富士勝昭氏（79）＝元横綱＝は額から流血しながらも、相手を寄り切った一番に、「見事ですね。見事としか言いようがないんじゃないですか。やっぱりいいね」と太鼓判を押していた。

→流血していたのは、若隆景

- ・(再掲) すごく成績を下げられている気がする
→「すごく成績を下げられている」気がする
→すごく「成績を下げられている気がする」 <全体的な構造的曖昧性>
- ・迷子になった選手の愛犬 拡散に次ぐ拡散、最後には発見
- ・(著者の息子) 80Mの赤ちゃんの絵をかく

⑥略しても好きな人

a ユーミンと中島みゆきが好きな人は竹内まりやも好きなパターンは多いと思う

b 今あの人が好きな人は：XX 錬愛術

「好きな」の構造的違い b 好きだという気持ちの持ち主を表す a 好きな対象を表す

また、「好き」「嫌い」がやっかいな理由の一つとして、目的語（対象）にも「が」をつけるという性質がある。→ユーミンと中島みゆき「を」好きな人、「が」好きな人

英語においては、目的語関係節（a）よりも主語的關係節の方（b）が、子どもの習得順序においても成人が文を読む速度を計測する実験においても、アドバンテージがある。

日本語においては、語順において目的語關係説（a）の方がアドバンテージがある。文の基本語順では目的語は主語よりあとに位置するが、先行詞ではなく目的語の方がより近くなる（？）

以上のように、日本語におけるいろいろなタイプの構造的曖昧性について触れてきた。